

成人期に診断を受け納得した ADHD者の語りから考察する Shared Decision Makingの様相

国際文化研究科 国際文化専攻
臨床心理学研究分野 博士前期課程
2025年3月修了

川崎 梨杏

主査 森川 友子 副査 稲田 尚史 三國 牧子

研究背景

ADHDは、近年成人の約2.5%に生じていることがわかっており、子どもだけの疾患ではないという認識が広まっている(齋藤ら, 2022)。その成人のADHD者のうち、「成人期になって初めてADHDの診断がついた者」(齋藤ら, 2022)に近年注目が集まっている。Youngら(2008)、Hallerödら(2015)、Aokiら(2020)の研究から、ADHDの診断は成人ADHD者の心理面に対して、ポジティブな影響もネガティブな影響も与えることが示唆されている。しかしながら、成人になって診断を受けた者と医師とのやり取りによって成人ADHD者がどのような気持ちになったかについては調査されていない。

研究目的

そこで本研究は、成人になって ADHDの診断を受ける者が診断後、医師とどのようなやりとりを体験すると、診断に納得感が生まれ、診断が良い経験になるのかについて、成人 ADHD者へのインタビューを通して検討し、成人 ADHD者にとっての Shared Decision Making(医師と患者との共同意思決定のプロセス: 以下 SDM) でどのような支援が求められるのかを明らかにすることを目的とした。

研究概要

表 インタビューの結果のまとめ

	診断前	診断直後	診断直後
Aさん	<ul style="list-style-type: none">人が気にしないようなことが気になるなど「なんで、なんで」と思う。	<ul style="list-style-type: none">「自分がそうだと思っていなかったのでびっくりしたけど、いわれてみたら、「ああ、納得」というか。」「人間関係で(トラブルが)あったのが、「なるほど」と。」	<ul style="list-style-type: none">Aさんが子どもの頃ではなく、大人になってADHDと気づかれ、診断された理由について説明される →「あ、そうだったんだ。」ってなんか知れたからよかったです。まだ知って気が楽になった。「ああ、それが原因なんだ」となったから・薬物療法(どんな薬か、効果のメカニズム)の説明をされる →「薬を飲んでどうなるんだろう」という単純な疑問・医師がAさんが理解できなかったところを察して「今のどこがわからなかった?」と質問をしていた。 →「モヤモヤしたままその日の病院がおわるっていうのはなかった」
Bさん	<ul style="list-style-type: none">ADHDじゃないかという予感を数年前からもつ	<ul style="list-style-type: none">「ああ、やっぱりそうなんだ」ところと、あんまりショックとか、嬉しいとかでもなく、長年予想していたことが本当にそうなんだなって言うところで。」「あなたはそうです」と証明が得られたような、感じというか。なのでちょっとホッとしたというか。」「ホッとした反面、「本当に診断受けちゃったな。どうしよう。」」	<ul style="list-style-type: none">WAISの結果の説明をされる →「なるほどね」、「能力がないんじゃなくて合ってないだけなんだよって言われて、だいぶ自信がついたというか。」 →「じゃあどうしたらいいですか」と質問をする・薬物療法(薬の種類とメリット、デメリット)の説明をされる →「薬物に関しては、結構抵抗感があったため、1年後に開始した

成果・まとめ

診断直後には、成人ADHD者がこれまで経験してきた問題や困難と結びつけてADHDについて医師が説明することが、ADHDに対する理解と、問題や困難への疑問の解消につながり、診断に納得感が生まれる可能性があることが示唆された。

また、SDMをする際には、医師からADHD者の意見を確認するなど、成人ADHD者のSDMへの参加を積極的に促し、信頼関係を大切にしながらADHD者の意見を取り入れる態度が大切であることが考えられた。このようなSDMにより、ADHD者が自身の特性について漠然と否定的に捉えるだけではなく、肯定的な部分も含んだより広く深く自身の特性について捉えることで、特性を整理することができるようになることが示唆された。

指導教員コメント



川崎さんは、成人ADHD者に対する治療・支援に関する論文をたくさん読む中で、ADHD本人が治療・支援開始時に、どこに困り感を持ち何から取り組みたいと感じているかが、殆どの論文に記載されており、治療者側の見立てで治療のターゲットが決まっている可能性があることを見出しました。そこで治療に納得している人が体験したSDMの在り方を探るという観点で川崎さんが調査をし、多様な臨床像を持つADHD者においても一般化して使えるような成分を抽出していったことは、この研究の目的に照らして素直であり、有用な知見が得られました。人の役に立つ研究をしたいという川崎さんの志が結実しました。

森川 友子